

【学力向上フロンティアスクール中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	東京都
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

東久留米市立東中学校(フロンティアスクール名)						
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	12	22
児童数	90	87	82	17	276	

実践研究の概要

1. 主題(テーマ)

基礎・基本の定着を図る取組の工夫

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

・数学科、実施学年第2学年・第3学年

生徒の理解や習熟の程度に差が生じやすい教科である。進路選択を前に、基礎・発展・定着の3分割により、一人一人の力に応じた指導を行うために第3学年で実施した。また第2学年は、昨年度習熟度別授業を既に実施した学年であり、生徒はもとより保護者にもその効果が理解されている理由により実施した。

・英語科、実施学年第2学年・第3学年

生徒の理解や習熟の程度に差が生じやすい教科であり、第1学年での基礎の上に、実践的なコミュニケーション能力を育成するために2年・3年の上級学年で実施した。

(2) 年次計画

平成
14
年
度

テーマ

基礎・基本の定着を図る取組の工夫

仮説

平成13年度までの研究をふまえ、本校の「育てたい生徒像」を以下のように立てた。

- ・基礎学力があり、自分で考えたり、問題解決していく力のある生徒
- ・意欲的に物事に取り組む生徒
- ・思いやりがあり、相手のことがわかる生徒

これらに基づき、「基礎・基本」の定着と「個に応じた指導」を目指して、数学と英語において、指導体制、指導方法、教材開発に関

する実践・研究を進めることにより、生徒一人一人が目的意識をもって、意欲的に学習に取り組むことができる。

研究内容・方法（習熟度別授業）

生徒の状況

- ・数学においては、各学年、基本的な計算等の基礎学力が不足している生徒が目立ち、習熟度にかかなりの開きが生じていた。第3学年については、数学に対する自信のなさから、学習意欲をもてない生徒がおり、授業中の集中力などに課題を抱えていた。
- ・英語においては、中学校でスタートする教科であるが、一般的に第1学年の2学期後半あたりから徐々に習熟度の開きが生じた。またかなりの初期段階から不適應を起こす生徒もいた。

目的

- ・生徒の一人一人の学習におけるつまずきや理解の度合いを教員が把握し、一人一人に応じた指導や支援を行うことで、わかる喜びを味わわせ、学習意欲をもたせる。
- ・学び方を習得し、自ら解決しようとする態度を育て、学習習慣を身につける。

グループ編成と指導体制

（数学）第1学年と第3学年で、各学級を2分割して実施。

教員2名と講師2名

（英語）第2学年と第3学年で、各学級を2分割して実施

教員3名

指導内容

習熟度別指導では、基礎コースでは基礎的な内容に絞って反復練習を行い、発展コースでは応用的な課題を中心に学習を進める。

評価

学習指導要領に定められている内容については、その到達度の第1次評価を評価することから、全ての生徒に対して同一のテストを実施し、その到達度を測る。

平成
15
年度

テーマ

一人一人の力に合った「わかる授業」の工夫と実践
仮説 平成14年度の仮説を継承

研究内容・方法

生徒の状況

数学科・英語科とも、昨年度習熟度別少人数授業を受けている

ため授業内容や進度については慣れてきている。数学科・英語科とも、第2学年・第3学年で実施した。生徒からも習熟度別授業については大きな期待があり、「以前より数学がわかるようになった」、「自分の力に合った授業が受けられる」、「前より先生に質問しやすくなった」などのアンケート結果がある。

目的

- ・生徒の一人一人の学習におけるつまずきや理解の度合いを教員が把握し、一人一人に応じた指導や支援を行うことで、わかる喜びを味わわせ、学習意欲をもたせる。
- ・学び方を習得し、自ら解決しようとする態度を育て、学習習慣を身につける。
- ・指導法の改善と個々の力を伸ばす視点に立った教材の開発を進める。

グループ編成と指導体制

第2学年を各学級2分割、第3学年を2学級3分割、1学級2分割の習熟度別授業を実施。

数学科 教員2名、講師1名、英語科 教員3名

指導内容

基礎コース・発展コース・定着コースに分け、それぞれの力に合ったコースを生徒自らが選択する。そのためには十分なガイダンスやプレテストの実施、保護者への説明に十分な時間をかけ、教員による適切な指導・援助を行った。英語科を例にとると、基礎コースでは、暗記とドリルを中心に基礎的な内容をしっかり身につけることをねらいとし、発展コースは、教科書の基本的な内容を身につけた上に、簡単な応用ができるように表現練習をすることをねらいとした。さらに定着コースでは、基礎的な内容の上に広い範囲の応用力をつけるための表現練習をすることをねらいとし、授業を進めた。

評価

学習指導要領に定められている内容については、その到達度の第合いを評価することから、全ての生徒に対して同一のテストを実施し、その到達度を測る。また興味、関心、意欲の観点における評価のあり方については、校内研修による全教科の検討、研修を深めた。

平成
16
年度

テーマ

習熟度別授業のあり方と確かな学力の検証のあり方

仮説 平成14年度を継承

研究内容・方法

習熟度別授業のまとめを行うとともに、外部評価を含め学力向上の検証のあり方を研究する。平成16年度は全校生徒に対して、数学、英語の少人数習熟度別授業実施を予定している。指導体制は2学級3分割、1学級2分割で実施する。

(3) 研究推進体制

・フロンティア少人数推進委員会

校長、教頭、研究主任、教務主任、各教科主任より構成

・研修部

教務主任・研究主任、教務部員より構成

・平成15年度の研究成果及び今後の課題

成果

- (1) 昨年度に比べ、さらに数学・英語とも学習に対する意欲が高まり、きわめて学習に対する前向きな姿勢が備わった。平成15年度の生徒のアンケートによれば、「他の教科でも少人数で授業を受けてみたい」「自分のつまずいているところがはっきりしてきた」等、少人数授業への高い評価を得た。また保護者のアンケートでも少人数に対する期待がきわめて大きく、「少人数授業は学力向上に役立っているか」の質問に対しては、昨年度の同項目より6パーセントの伸びを示し、全体の82パーセントを占めた。
- (2) 英語では、特に学習指導要領で重視されている実践的コミュニケーション能力を育成するにあたり、極めて大きな効果があった。特に小グループによるスピーキングの言語活動や、リスニングトレーニングにおいて、一人一人の動に十分時間をかけることが可能となり、豊かな言語活動を実践させることができた。
- (3) 特に数学においては、教えあい、励まし合いなど学習集団の中で、好ましい人間関係を形成することができた。これにより、一人一人の学習への意欲は高まり、教科指導だけにとどまらず、学校生活全般にわたり意欲的な姿勢を育てることができた。
- (4) 新しい指導法を研究実践することにより、教員一人一人の指導力を高めることができ、さらに少人数以外の一斉授業やクラス経営にお

いても、生徒一人一人の良さを把握し、個性を伸ばす質の高い指導力を育成することができた。

課題

- (1) 数学・英語とも、基礎コースを選択した生徒の到達度には差があるため、さらに個別の課題に対応するための指導及び指導体制を工夫しなければならない。
- (2) 学力がいかに定着させることができたか、定期考査や単元毎のテストにとどまらず、客観的なデータの蓄積と学力の検証の方法が来年度以降の課題である。
- (3) 数学科では、教員2名に講師1名の指導体制であったため、講師との授業についての綿密な打合せや教材準備にあてる時間の確保が困難であった。

・学力把握のための学校の取組について

- (1) 昨年度に引き続き、定期考査後や各単元終了時、生徒との面談等を活用することにより、学習の状況や感想を集め、学力の変容を見取った。また本年より11月に教育相談週間を設け、担任と生徒、保護者により、学習意欲や少人数授業についての意見交換を行った。
- (2) 学校評価の外部評価の一環として生徒、保護者へのアンケートを実施し、少人数習熟度別授業についての意見や感想を広く求め、あわせて学校評議員会においても少人数授業の参観と評価を求め、来年度以降の指導計画に生かしていくことを現在研修部で検討を進めている。
- (3) 定期考査は昨年に引き続き、コース別の問題ではなく、全ての生徒に対して同一の問題で行い、習熟の差や学びの違いを把握することに努めた。

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

東久留米市研究奨励発表会

日時 平成16年2月17日(火)午後1時30分より

場所 東久留米市教育センター 5階 研修室

対象 小・中学校教育関係者

フロンティア地区連絡協議会

日時 平成16年3月初旬実施予定

場所 東久留米市立東中学校

対象 東中学校評議員及び東久留米市立小・中学校教育関係者